

泥団子の神様

「ねえ、泥団子の作り方教えて？」

これは、私の幼少時代に言われた言葉ランキングの一位に君臨する言葉だ。私の作る泥団子は、きれいな球体で、表面はつるつる、誰もが触れたくなる、万人受けの泥団子だ。そんな泥団子を作る私は、みんなに「泥団子の神様」と呼ばれていた。

私は、活発な子だった。幼稚園に入って、一番初めにハマったものは、鉄棒だ。逆上がりはどうしても習得したくて、毎日小さな手にたくさん肉刺をつくって帰った。二番目にハマったものは、一輪車だった。やればやるほど、上達していくのが楽しかった。ここまできれば、だんだん分かってきただろう。私が、アグレッシブで男勝りな女の子だったことを――。では、なぜ静かに黙々と作業する泥団子にハマり、その道を極め、「泥団子の神様」と呼ばれるまでに上達したのだろうか。

初め、泥団子作りは、私にとって一つの暇つぶしだった。私は、よく兄のソフトボールの試合に連れて行かされていた。ソフトボールの試合は、当時の私にとって、非常につまらないものだった。（のちに、私は十年間ソフトボールをすることになるのだが、当時の私はまだ知らない。）そんな時、下を見ると、グラウンド特有の上質な土があった。これが私の泥を握り始めたきっかけだ。暇、下を見る、土発見、握ってみる、ハマる、こんな感じだろうか。不格好だった泥団子は、だんだん進化を遂げていった。

幼稚園でも泥団子を作りなくなった私は、泥団子に最適な土を求めて探し回った。幼稚園の土は、さらさら過ぎて、泥団子には向かなかった。しかし、園内の一番奥の階段の下だけの土は、最高だった。そこは影になっていて、少し湿り気のある土は、泥団子専用の土のようだった。

その場所を見つけてから、一層私は、泥団子にハマった。最初は、一人で黙々と作業していた。しかし、いつからだろうか、私にはたくさんの弟子がいて、「泥団子の神様」と呼ばれ始めた。一人で黙々と作業するのも好きだったが、みんなと一緒に作業するのも悪くなかった。

ある日、私は、自分でも驚くくらい美しい泥団子を作ってしまった。この先、もうこれほどの泥団子を作れないと判断した私は、その泥団子を永久保存したくなった。外気に触れて、乾燥しないようにビニール袋に入れて、家の倉庫に入れた。私は、その泥団子を親友のように扱い、どこにでも連れて行った。兄の小学校の運動会に連れて行った日、事件は起きた。手が滑って落とした。ただそれだけだった。その泥団子との別れは、儚く一瞬の出来事だった。その後、大泣きして、一週間ほど、幼稚園児なりに病んだ。泥団子を作ることもなくなった。

もうあの頃のように、美しい泥団子は作れないだろう。しかし、たまにはあの頃の思い出に浸りながら、作ってみるのも悪くないかもしれない。